

韓国から見た壬辰倭乱

崔永昌（国立晋州博物館）

発表要旨

16世紀の末、日本の朝鮮侵略から始まる壬辰倭乱（訳注：文禄・慶長の役）は、韓半島を舞台に朝鮮と日本、そして朝鮮を救援した明朝など東アジア三国の軍隊が参戦した国際戦争である。7世紀半ばの白村江の戦いと13世紀後半の蒙・麗連合軍の日本征伐（訳注：蒙古襲来）など、以前にも韓・中国連合軍と日本軍との対決構図で東アジア三国の軍隊が衝突したことはあるが、壬辰倭乱ほど朝鮮王朝や近現代の韓国人たちの歴史と記憶に刻印された事件はなかった。近代日本帝国の韓国強占とともに韓国の日本に対する歴史認識と記憶、国民情緒などに決定的な影響を与えたのが壬辰倭乱である。

現代、韓国で壬辰倭乱についての理解に大きく影響を与えたのは、1970年代の民族主義に基づく国難克服史観である。この史観の影響により、初期の戦闘で敗戦を繰り返した官軍と比べ、義兵の活躍が強調された。この過程で、朝鮮後期から繰り返し顕彰されている李舜臣将軍は、聖雄（訳注：聖なる英雄）として位置付けられ、朝鮮水軍の活躍も絶対化される。2000年代以降、義兵と朝鮮水軍の勝戦のみを中心に壬辰倭乱を見る観点から脱却し、一国史的な観点から離れて東アジアの視座から理解しようとする試みが増えつつある。しかし、今までも国難克服史観に基づいた壬辰倭乱の理解を完全に克服していないのが韓国の現状である。ここでは、壬辰倭乱の性格と原因、経過と影響、名称などに関する韓国の視座を紹介する。

略歴

〈崔永昌/Choi Young-Chang〉

1964年、釜山生まれ。1986年、高麗大学校史学科を卒業。1989年、高麗大学校大学院碩士（＝修士）課程を卒業。1992～2013年、文化日報の記者。2006～2007年、カナダのブリティッシュコロンビア大学（UBC）韓国学研究所の訪問学者。2013～2015年、韓国の文化財庁の下で国外所在文化財財団の調査研究室長など。2015年～現在、国立晋州博物館長。朝鮮時代の水軍と壬辰倭乱の時に派遣された明軍について興味を持っている。